朝日歌壇 俳壇

〈ウメⅠ〉　日高理恵子

うたをよむ　雪と氷のうた

北山あさひ

一月下旬、北海道は真っ白な冬の真っただ中。北に生きる一人一人に、それぞれの雪が降り、氷が光を反している。

流氷に遭難したる僚船を救助にゆきたる船も帰らず　駒板芳夫

僅かなる仮眠に耐へる若さあり着氷砕く掛矢を振りて

我が船は北のはずれのカムチャツカ朝な夕なにトドの群れ来る

昨年刊行の歌集『我が海の歌』は、かつて北洋漁業の現場にいた元漁師による、記憶と鎮魂の一冊だ。流氷や凍てつく寒さとの闘い、大きな自然との対峙に、心の深いところが不思議と満たされていく。駒板は釧路市在住の九〇歳。「花形」とも呼ばれた北洋漁業だが、それを知る人ももう少なくなった。これらの歌が書き残された意義は大きい。

最後の北洋船が出漁したのが昭和六三年。その前年に誕生したのが旭川市在住の塚田千束である。

女にはわからぬと笑む松の幹　ひとり

ひとりの雪庇せりだす　塚田千束

勝ちに行く　踵の雪を蹴り落とし冬に生まれたたましいだから

塚田の『アスパラと潮騒』は昨年の北海道新聞短歌賞佳作に選ばれた一冊。男尊女卑的な社会で女性として生きることの悔しさや怒り、あるいはそれらを反骨のエネルギーとして一歩を踏み出す。そうした場面に雪が詠み込まれている点に注目したい。冷たく降り積もる雪は、ときとして人に寄り添い、勇気づけてくれるのだ。

北海道の雪と氷の季節は四月下旬ごろまで続く。（歌人）

◇朝日俳壇　入選取り消し　2023年1月22日付の俳壇に掲載した「一声で笑顔とわかる初電話」は、同一の先行句がありましたので、入選を取り消します。

訂正　1月21日付俳壇の「孤独との付き合ひ方を日記買ふ」の作者名が「松村敦視」さんとあるのは「村松敦視」さんの誤りでした。編集時に入力を誤りました。

☆印は共選作。掲載作は記事への引用や、電子メディアやSNSへの掲載・収録をすることがあります。投稿は無地のはがき1枚に1作品、未発表の自作のみ。作品の横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104・8661　晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。二重投稿は不可。選者が添削する場合があります。

小林貴子選

新日記こころの天気加へけり　（茨城県阿見町）鬼形のふゆき

お客さんなまこでしょうと声かかる　（秋田市）神成　石男

アブラカダブラ加湿器擦ってみる　（香芝市）土井　岳毅

餅花や亭主ゐぬ間にそっと触れ　（大阪市）上西左大信

クリップといふ形あり春を待つ　（熊谷市）内野　修

祈り励まし助け合ひ冬の能登　（埼玉県長瀞町）坂上ふみを

八代亜紀彼岸の春へ舟を漕ぐ　（千葉市）丸茂　和志

ホスピスのボーイフレンド初明り　（飯塚市）古野　道子

ナビゲーションなどは要らぬぞ老の春　（岐阜県神戸町）林　宏尚

着水の白鳥こともなげの顔　（枚方市）阪本美知子

【評】一句目、心の中は曇りのち晴れかな。私も毎日記したい。二句目の店主「お客さん、海鼠でしょう？」。答え「ばれましたか」。三句目、白い蒸気を吐いている加湿器が、実はあのランプと同じで…。四句目、そっと触れるくらい大丈夫。

長谷川櫂選

八代逝く吾熱燗で偲ぶかな　（高萩市）小林　紀彦

一枚の布のあやなす春着かな　（茨城県河内町）吉村　巌

春の水蛇篭に転居源五郎　（河内長野市）西森　正治

寒月や闇に一本滑走路　（静岡市）松村　史基

舟唄の流るるテレビ飾取る　（行田市）荻原　義久

冬麗やリュックに揺るる水の音　（ドイツ）ハルツォーク洋子

☆三才の手があたたかい冬の道　（川崎市）かとうゆうき

をりづるの紙ひとひらの淑気かな　（彦根市）阿知波裕子

水替へてとろりと沈づむ寒の餅　（名張市）稲住　青陽

真民の詩集と出会ふ冬籠　（高槻市）若林眞一郎

【評】八代亜紀さんの追悼句あまた。一席。ここは熱燗しかない。「舟唄」は「ぬるめの燗」だが。二席。思えば着物は一枚の布。魔法のような。三席。蛇篭まで水が増した。源五郎も喜々と。七句目。十歳。十句目。真心の詩人、坂村真民。

大串章選

蕉翁の影を幻視の枯野かな　（横浜市）渡辺　萩風

初空を飛行機雲の一行詩　（鎌倉市）黒岩　伸幸

水の色氷の色になりにけり　（相模原市）井上　裕実

雪おんな小野小町と恋をする　（新座市）丸山　巌子

平和ボケのままで老いたし冬桜　（北名古屋市）月城　龍二

青空に何も隠さぬ枯木立　（我孫子市）森住　昌弘

寒鯉のいのち重たく浮いて来ず　（東京都足立区）望月　清彦

春めくや始発電車の老二人　（相模原市）はやし　央

人日や我を掘ること楽しまん　（筑西市）加田　怜

放棄田に春の七草摘みにけり　（大村市）小谷　一夫

【評】第1句。茫茫と広がる枯野。「旅に病で夢は枯野をかけ廻る　芭蕉」を思い、芭蕉の生涯を想う。第2句。新春の空を奔る飛行機雲はさまざまな想像を誘う。「一行詩」が言い得て妙。第3句。青から白へ。水の変化を「色」で端的に示した。

高山れおな選

元朝の蜘蛛ひたすらに上昇す　（甲府市）中村　彰

刃物屋の棚に折鶴年新た　（岐阜市）三好　政子

寒晴は空の正装なりしかな　（高松市）渡部　全子

蒲団掻くねこを蒲団に押さへ込む　（大阪市）今井　文雄

襟巻も帽子も取らず止り木に　（大津市）星野　暁

種鯉を抱いて移せり春の水　（河内長野市）西森　正治

野球しようぜ大谷グローブ春を呼ぶ　（横浜市）正谷　民夫

七草や薄日さすらふ能登の海　（西東京市）中村　紀子

極寒の夜の長き事如何ばかり　（高知市）和田　和子

☆三才の手があたたかい冬の道　（川崎市）かとうゆうき

【評】中村さん。苦手な人も多い蜘蛛だが、見かけるのは縁起が良いとも。この蜘蛛ももちろんポジティヴな気分を纏う。三好さん。木と鋼の地味な色調の中に鮮やかな折鶴の色。取合わせの妙。渡部さん。「正装」の語の発見にウィットあり。